

幻の街キラク

JJ1SXA/池

幸齊たけし作詞、新沼謙治作曲で新沼本人が「♪♪浜の爺様が 酔うたび聞かす…キラク キラク 爺様一人が 語るだけ キラク 野付半島 まぼろしの街 キラク♪♪」と歌う、「まぼろしのキラク」という歌があります。

北海道の野付(のづけ)半島に残る伝説として、「幻の街キラク」と呼ばれるものがあります。「歓楽街があった」「夜じゅう、灯りが消えることがなかった」「遊女がいた」など、出典は定かではありませんが、謎に包まれた、ロマンある話として伝わっています。

江戸時代の古文書には「キラク」という記述はありませんが、寛政11年(1799年)に江戸幕府が国後島への交通の要所として「野付通行屋」を設置したという史実が明らかになっています。対岸にはニシン漁のための番屋が60軒ほど立ち並んでおり、通行屋では、畑を作り、様々な野菜を育てようとした記録も残っている、野付通行屋跡遺跡は、発掘調査が行われ、出土品は別海町郷土資料館で展示公開しています。

WEBでは、北海道に、「この世の果て」と呼ばれる場所がありますとのことで、立ち枯れた木々に荒涼とした湿地、ここは野付半島という海に突き出たかぎ針状をした砂の半島で、全長約26kmの中に、砂浜、干潟、草原、湿原、森林といった多様な自然環境を見ることができる場所、中でも「トワラ」という場所が「この世の果て」と呼ばれています、侵食・風化で何時かは無くなってしまうかもしれないこの場所は、まさしく、「この世の果て」と呼ぶにふさわしいのかも知れません、となっています。

トワラは、長い時間かかって作りあげられた砂嘴(さし)の上に成立したトマツ林が、年々半島周辺が地盤沈下し、それに伴い海水が浸入、立ち枯れの森となったもの。

砂嘴というのは、沿岸流により運ばれた砂礫(されき)が陸地から海中にのびる形で堆積し水面に現れたもので、多少湾内に湾曲した形の鉤(こう)状砂嘴(伊豆半島西岸の戸田湾口の御浜岬…みはまみさき)や、発達の途中で成長方向が変わって枝分れた分岐砂嘴が、この、野付半島で、成長先端がはっきりしている点で砂州(さす)と区別されるとのこと。

それでは、砂州とは、海や湖にたまった砂礫が水面に現れた堆積地形の一種で、岸よりやや沖合にでき、一般に細長く、陸との間に潟(かた)をいただくものもあり、遠浅の場所で波浪が沖合で砕け、波の力の衰える所に砂が堆積してでき、湾口をふさぐように発達するものが多く、京都府の「天橋立」、鳥取県の「弓ヶ浜」が好例とのこと。

野付半島はラムサール条約に登録されている湿地です、ラムサール条約というのは、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」と定義されています。

野付半島の付け根から野付半島の観光の拠点となる野付半島ネイチャーセンターまで、フラワーロードと呼ばれる一本道が通っていて、この道を走っていると湿地とともに様々な水鳥を見かけることでしょうかとのこと、ここではすぐ横が海で、しかも水面が間近です、野付半島と野付湾周辺では、今までに235種類の野鳥が確認されているというから驚きです、この野鳥の楽園を守るのにも条約が重要な役割を果たしていることはいまでもありません、バードウォッチングには最適な場所のようです。

かって、北海道を、20日間もかけてドライブ旅行をしたのに、海岸が浸食され、砂浜が

無くなった我が故郷を思い出させる、この野付半島には行き損なった、根室から中標津町を經由して知床半島方面へ海岸線を走ったのに、うっかり素通りしてしまい、残念至極、北海道観光地の研究が足りなかったのだ。

